



TITLE:

星の文藝欄

AUTHOR(S):

CITATION:

星の文藝欄. 天界 1935, 15(170): 315-316

ISSUE DATE:

1935-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167028>

RIGHT:

★ 星の文藝欄 ★

小 品

ネペンテスを認めた喜び

前 田 治 久

夜中目を醒ますと外氣の寒さにしつとりと窓ガラスは露ばんでゐる。づぼらにも脱ぎ棄てたハンテングキャツプで露をぬぐひガラス越に南天を見上げると、早や彼の火星は南中に迫まつて夜半の星空を華やかに飾つてゐる。今や望遠鏡をむけられぬが幸いと西へなほも急いでゐる。然し私は之を見逃す事は出来ない。今夜のシーイングは……と思ひながらも鏡筒を彼に向けた。ピントのあつてない高倍率の視野をはづかしやの火星は顔をそむけて逃れて行く。然し私は行き逃してはなるものかと使ひ難い小さな経緯臺で再びピントを合はせて彼を追跡する事幾度か、亂れる氣流、彼の顔の周圍は鋸の齒の様である。然し失望する事はない、又一瞬に氣流は靜かになり彼の周圍が見え出された。デフエイツションは R.P. だ、なほも氣流は靜かになり、飾る彼の姿がなほ一層美しく見えて來た。中央經度 270 度ユ 1 トピヤとカシウスが明瞭。私の呼吸は瞬間はたと止まつた様になつた。星のこぼれ落ちさうな空の下で、息もつがずにカシウスの先端をにらんだ瞬間、走つた黒線が彼の顔を横切つた。目は一點に集中され一度見えれば常に認められる其の線は正にネペンテスだ。觀測能率は實にクライマックスだ。全能力をかけて認めた喜び私にとつては非常に貴いものでした。例へそれが學術的に價值のないものにしても、又火星中太い運河であるにしても、たやすく見られないものを認めた喜びはいやがうへにも火星觀測の快味と實感をわかせた。

* * * *

あざやかに南くるすの星みえて

船ぢすすしき夕ぐれのそら

暹羅灣に夕日沈めば船のゆくて

南くるすの星のぼりけり

——(新村出氏「春の紀行」より)——

詩 二 篇

——(これは Poetry でなくて Poem です)——

稻垣武五

海の日没 —— 南洋への途上にて ——

眞紅の戀を成就した貴婦人は歪みながら海の線に接吻して海の向ふに溺れる。

間もなく大きすぎる蒼空は鼠算で殖える寶石商の金倉になり、盛上つた橢圓形の海の皮膚はピチャピチャと囁く無数の小山に重い空気を舐めさしてゐる。焦点が等速度運動をする巨大な橢圓の海面を眞二つに分けるのは前進する汽船です。暗車は何か叫びながら後押しをしてゐる。

海に嫁いだ貴婦人のドレスの裾を抱きたいやうに、舷側に新製されたビールの泡は、果しないモノローグをつづけ乍ら夜光蟲のやうに吃水線を過ぎて行く。

★ ☆ ★

流 星 観 測

網膜と局所的な筋肉と頼りない骨格とを曉まで泣かせたくない。

僕は空間の掟を咀嚼しながらも猫の背を撫ぜたやうに人魂と原子とを怖れる。

そして空の迷つた胎児を記録する。

◇ オモ舵 トリ舵 ◇



船の頭を左の方へ向けるために採る舵を取り舵といひ、右の方に向けるために採る舵を面舵といふが、その語源に左の一説がある。

昔は船から外に見えるものゝ方向を言ひ表はすのに、船主を子の方向として圖のやうにした。そこでオモ舵を昔は卯の舵といつたのが、無學の船頭の間に訛つてオモ舵となり、酉舵が取り舵となつたのである。